

暗雲が立ち込め、海鳴りが轟く。

結界すらも無効化するような圧倒的な「負」の気配が、その場所に集っていた。

邂逅

天を突く九本の尾を揺らし、白面の者がそこにいた。その金色の毛並みは、恐怖という感情そのものを象徴している。対するは、法輪を背負い、右手に退魔の剣を携えた異形の巨神。伏黒恵が命を賭して呼び出す最強の式神、八握剣異戒神将魔虚羅である。

白面の者は、自らの前に立つ小さな影を見下ろした。人間でも妖でもない、理の外側にある存在。

「……不愉快な木偶（でく）よ。貴様から放たれるのは、恐怖ではない。ただの『無』か」白面の者が尾の一本を軽く振るだけで、一帯の地殻がめくれ上がった。凄まじい衝撃波が魔虚羅を襲う。

旋回する法輪

魔虚羅は防御の姿勢を取ることなく、その一撃を正面から受けた。体の大半を削り取られ、地面に叩きつけられる。しかし、背後の法輪がガチャンと音を立てて回った。

致命傷と思われた傷が瞬時に塞がる。魔虚羅は立ち上がり、白面の者へと疾走した。

白面の者は細い目をさらに細め、冷笑を浮かべる。

「ほう、再生か。ならば、跡形もなく消し飛ばしてくれる」

尾の先から放たれた雷火が、魔虚羅を包囲した。数千度の熱と数万ボルトの電圧が同時に襲いかかる。だが、またしても法輪が回った。

炎の中でもがいていたはずの魔虚羅が、平然と歩みを進める。その体はすでに白面の者が放つ属性攻撃に対して「適応」を終えていた。

剣と尾の衝突

魔虚羅の右手に備わった退魔の剣が、白面の者の鼻先をかすめた。

白面の者は驚愕した。自らは陰の気の塊であり、正のエネルギーを帯びた退魔の剣は、本来触れることすら忌まわしい。

「小癩な。我を、この白面を、誰だと思っている！」

白面の者は九本の尾を同時に展開した。

ある尾は突風を呼び、ある尾は毒霧を吐き、ある尾は物体を石化させる。魔虚羅はそれらの攻撃を受けるたびに傷つき、膝をつく。しかし、そのたびに法輪が回り、新たな適応が完了していく。

突風はそよ風になり、毒は霧散し、石化の波動はただの光へと変わる。

終わりのない適応と根源的な悪

魔虚羅の剣が白面の者の前肢を深く切り裂いた。白面の者は、数千年の時を経て初めて「痛み」と「不可解」を同時に味わった。

魔虚羅はただの破壊機械ではない。戦いが長引けば長引くほど、相手のあらゆる手段を無効化し、必勝の術を見出す後出しの神格。

しかし、白面の者は単なる力だけの存在ではなかった。

「適応だと？ 形あるもの、理あるものならばそれも良かろう。だが、我は闇。人の心の底に澱む、名もなき憎悪そのものだ」

白面の者は肉体的な攻撃を止め、その精神から溢れ出る「純粋な惡意」を解き放った。魔虚羅には心がない。だが、魔虚羅を支える呪力の根源は、人間の感情である。

白面の者の絶叫が、空間そのものを震わせた。それは生物としての適応を超えた、概念的な侵食だった。

結末

魔虚羅の法輪が狂ったように回転を始める。

白面の者の存在という「現象」すべてに適応しようとする魔虚羅。

自らを拒絶する世界そのものを食らい尽くそうとする白面の者。

激突の瞬間、光と闇が混ざり合い、周囲の空間が爆発的に膨れ上がった。

爆煙が晴れた後、そこには誰もいなかった。

ただ、冷たい海風だけが、何事もなかったかのように荒野を吹き抜けていった。